

1998年6月24日、都立大学文学部教授高山宏氏、エディターの都築響一氏をお迎えし、第3回物学研究会が行われました。両氏共通のテーマは「モノマニア 現在フェティシズム考」。各50分という短い持ち時間の中で、高山氏はフェティシズムの歴史・概論を、都築さんには東京を舞台とした若者と物の関係を考察していただきました。

以下は両氏の講演の骨子をまとめたものです。

高山 宏

モノマニア・フェティシズムの歴史

フェティッシュ、オブジェクト（物）という概念は

17世紀のヨーロッパに誕生した

僕がこれからお話ししようというものは非常に大きなテーマで、とても50分などでは語り尽くせません。なので、17世紀以降を時代順に幾つかのエポックに沿ってお話することになると思うんです。途中で時間切れになるかもしれませんが、できる限りやってみましょう。

さて、「フェティシズム」あるいは「物」、英語では「オブジェクト」という言葉を、オックスフォード・イングリッシュ・ディクショナリーで引いてみますと、おもしろいことが分かってきました。「オブジェクト」という言葉は、実は14世紀位からあるんですが、愛好や情念の対象という特殊な意味を含むようになるのは17世紀。そして「フェティッシュ」あるいは「フェティシズム」という言葉もほぼ同じ頃に確立されたらしい。

「フェティシズム」の語源

では17世紀、つまり1600年前後のヨーロッパを歴史的に見てみるとどんな時代だったのか。まず第一に、空間が一挙に拡大した時代ということが言えます。例えばアメリカ大陸が発見されて100年が経ち、多くの清教徒を乗せてメイフラワー号が新大陸アメリカに向かって出発した。あるいはガリレオ・ガリレイが望遠鏡を発明して、宇宙空間を観察できるようになった。これは有限と信じられていたそれ以前の思想体系や宇宙体系を崩壊させるほどのインパクトを人々にもたらしました。言葉を変えれば、キリスト教が許さなかった「無限」という概念が人々に浸透していったということです。この時代には、キリスト教の世界でも宗教改革が起きてきます。聖書と祈りが全てであるとする新興プロテスタントに対抗するために、カソリックはキリストや聖人達の杖だとか聖布とか、いわゆる聖遺物を陳列してみせるという方法をとる。「フェティシズム」という言葉の起源は実はこれなんですね。

愛玩の対象としての「オブジェクト」

さて、お配りした資料の冒頭にジョン・ダンというイギリス人の詩人の詩を載せました。この詩は「全世界が拡大する中で、自分は愛する君と共にこの小さな部屋に生涯留まる。ここで思いっきり愛し合いましょう」という意味のことを詠ってます。つまり、ダンは17世紀に起きた空間や宇宙の拡大と、この詩の中にある「one little room」という小さな部屋（空間）、この2つの空間の激しい拮抗を象徴しているわけです。

事実、1600年を境に、ヨーロッパのインテリアの歴史にはとんでもない変化が起きます。それはヴンダーカマー（ワンダー・ルーム、驚異博物館）と呼ばれているもので、ひとつの部屋にいろんな物を集める、つまりコレクションの元祖のようなことが起ります。ただ、現代のコレクションと大きく異なっていて、そこにはタクソノミア（分類学）という概念が介在しない。ただただ物を集め並べるわけです。けれどもばらばらに並んでいた「物」が、ある瞬間に恣意的にか偶然にか、彼なり彼女なりにとって有意義な組み合わせが生じ、総合されるようになる。美学上ではこれを「マニエリスム」と称し、この人工的な組み合わせを「インヴェンション」とか「イマジネーション」とかという言葉で表します。

今日のテーマである「フェティッシュ」の発生の源となる「個物」あるいは「愛玩の対象としてのオブジェクト」という概念は、空間拡大と個室インテリアへの執着という2つの相反する価値の空間的拮抗と深く関わっているのです。

「オブジェクト」から「マニエリスム」へ

マニエリスムのおもしろい例をもうひとつあげてみましょう。資料の中のアルチンボルトという画家の絵を見てください。これは何十種類という果物で表現した王様の肖像です。ちょっと変わっていてグロテスクなんですが、この絵の意味はこうです。まずこの絵が描かれた時代には温室などありません。「オレンジリー」つまり温室は17世紀後半に登場します。温室がない時代に、夏にしか取れない果物と秋にしかとれない果物が共存する、そしてそれが王の姿を構成するというのは、つまりこの王が自然のサイクルさえ支配する経済力と権力を所有しているということを描いているわけです。

このように常識を超えた非合理的な論理を構築してまで、ひとつの世界体系を総合させようという想像力を「マニエリスム」は含んでいます。第二次大戦に敗れた1950年代のドイツが「マニエリスム」の概念を復権させたのですが、偶然ではなさそうですね。

「マニエリスム」から「表象と記号の時代へ」

そして「博物学」へ

17世紀から18世紀にかけて「物 オブジェクト」に関わる大事件として、この時期に「物」に対して（マルクスのいわゆる）使用価値以外に交換価値が出てきたことがあります。マーケットの一挙拡大ですね。現代でいう株式相場のようなものが発生し、アムステルダムチューリップ相場で世界初の株式暴落が起きています。皆さんご存知の「ロビンソン・クルーソー」の作者であるデフォーも相場で大損したブローカーでした。他にも紙幣が誕生したり、ライプニッツによって0と1の二進法の原理とその可能性が発見されたりしています。多分これは、1660年前後になると、それ以前の言葉では表記や表現できない「物」がたくさん入ってきていて、それに対応する「表象」という表記制度が生まれたということでしょう。

17世紀をまとめると前半のマニエリスムから後半の表象の文化への移り変わり、つまりは個物の増大とそれに見合う記号が発生した100年であったと言えるでしょう。そしてその総合が18世紀の、例えば「博物学」に繋がっていく。

17世紀から18世紀 「描写」への固執

さて、資料を見てください。スヴェトラナ・アルパースという美術史家が書いた『描写の芸術 17世紀のオランダ絵画』という本の表紙を載せてあります。この本はいろんな意味で「ディスクリプション＝描写」とは何であるかを考えさせる非常におもしろい本です。なぜなら「ディスクリプ＝描写する」という営みをちゃんと説明するのは非常に難しい。

文字による描写を考えますと、たとえば「彼は馬鹿だ」といえば一行で内容は伝えられますが、これは「ディスクリプ」ではなく「ステイトメント」ですね。「彼は髭を生やしていて、その髭はこんな具合で、こんな物腰で、こんな態度で・・・」と書き連ね、だから「彼は馬鹿だ」と分らせること、これがすなわち描写です。このようなことは近代文学に親しんでいる現代人には当たり前のこのようですが、「描写」は17～18世紀の発明品の一つであり、博物学も描写することと深いつながりを持っています。つまり「博物学」とは対象物をデータによって正確に記述＝描写することが基本だからです。今でも正体不明の人や物を「ノンディスクリプト」といいますが、語源はこの辺から来ています。

文学だけではなく、絵画の世界でもすでに17世紀後半のオランダで確立された「静物画＝スティル・ライフ」があります。一枚の画布の中にできるだけいろんな物を載せ、それぞれの個物を細部に至るまで克明に描写する。個物の文化、オブジェクトの文化、それを表現するための「ディスクリプ」が静物画という奇異なジャンルだったので

百科事典の登場と「描写」

次に資料の2ページにある人体図を見てください。これはチェンバースという英国人が、1728年に作った世界最初のテクニカル百科事典です。これは何が画期的であったかという、項目がABC順に整理された最初の辞典でもあったからなんです。これ以前の辞典というのは、「家族」という項目を引くと家族に関するもの全てが記述されていた。つまり人間の思考の体系によって構成されていたといえます。例えば「父親」と引くとその後に「母親」が載っているとか、「存在」を引けば「非存在」とか「死」について記述されているとか。全てを断片化してある人工的な規則で強引に整理してしまう近代の方法に対して、ナチュラルな秩序にそっていたわけです。人体が切り刻まれて、個々の断面、部分として徹底的に描写されますが、孤立した「個」に関心が向けられていた事を見事に象徴している図です。百科辞典といえば、フランスのディドロの「百科全書」ですが、実はチェンバースの仕事の壮大なパクリなんですね。

近代文学の誕生と描写

さて、興味深いのはこの百科事典が出版される前後10年程の間に、近代小説というのが誕生したことです。誰もが知っている『ロビンソン・クルーソー』や『ガリバー旅行記』などですが、これはまたデータ小説とも言えるのです。ロビンソン・クルーソーやガリバーが航海に出た舟や島の様子、航海の模様などが、具体的な数字のデータによって事細かに描写される。周囲何マイルで東経何度で北緯何度に位置する島だとか、舟のマストは全部で何本あってとかいった、直接物語に関係しないようなことまで描写し尽くし、記述するようになるのです。不思議なことに、それ以前のヨーロッパの文学にはこうした描写は存在しない。すなわち、人々が「個物」へ視点を投げかけ、認識しようと努めたことの現れであって、そして言葉そのものがフェチ化し始める。

エロティシズムの描写

18世紀のヨーロッパ文学で見逃せないのは「女中陵辱小説」なるもので、ヨーロッパ人が自分の個室（プライベート・ルーム）を持った18世紀中期の文化を如実に反映しています。要するに鍵穴から部屋を覗くといった類の内容で、主人が個室で女中を視姦し、陵辱する内容をえんえんと描写しています。資料4ページの図のような光景ですね。「個室」と「描写」が誕生していなければ生まれなかつたらう類の小説です。現代、「フェティッシュ」というと、もっぱら性的な結びつきのみ考えてしまいますが、元をたどればこの辺にあるのかもしれない。きょう日の視覚雑誌が売りにしている「袋とじ」の元祖のような好色本が当時はやりました。「袋」を切り開くと性が営まれている「室内」が覗き見られるという仕掛本です。

18世紀には「風景」なるものにも「所有欲」や「エロティシズム」を感じるという不思議なことが起きていた。風景に、裸の女性と同じように「感じる」ってどういうことなのか（笑）。引き続き資料を見てください。ここに当時の庭園の平面図と風景画があります。平面図の中の番号のついた地点から眺めると、この絵のような風景が見ること

ができますという図なんです。18世紀のイギリスでは土地を所有し、庭園を造ることが流行します。そしてこの図のように、ひとつの「対象」を幾つものアングルから見たという多様性が生まれ、風景画が人々に愛好されるんです。複数のアングルの集積という方法を今日の東京の裸雑誌の編集者ほどよくわかっている人たちはいないようです。

18世紀は「イマジネーション」誕生の世紀

17世紀から18世紀への移り変わりの中で、人間の思考体系に大きな変化が起ります。

17世紀は「ヴァンターカマー」が象徴するようなマニエリスムの時代でした。それが18世紀になると、チェンバースの本で見た、ABC順というような人工の人間秩序に則って構成したり、「イラスト」で描かれた人体や建物の断面などで、何でも見てやろう、描写してやろう、そして総合してみようという意志が顕在化してきます。

ちょっと補足しますと、18世紀に確立した「イラストレーション」の語源は中世の「イルミナーチオ」、つまり暗いところに光をあてるということです。それから断面を私達はセクションと言いますよね。先ほどの人体図を思い出していただければ、「セクション」の語源がラテン語の「セッコ」で、つまり刀で切りこむという意味だということが納得できると思います。18世紀の精神、何でも知りたい、秩序だて明快に記述したいという精神が、図鑑や百科事典強いては博物学を生み出していったわけです。修辞学では全体と個物の関係を「シネクドキー」と言いますが、後にフェティッシュと呼ばれるシネクドキーの体系、すなわち個物が全体を表しているという思い込み、この思い込みの隙間を繋ぐのが「イマジネーション」です。このイマジネーションの能力のある人間がちょっとキレると、フェティシストということになるわけです。

そして「現代」

「フェティッシュ」という言葉が性的な意味を帯びるのは、再びオックスフォード・イングリッシュ・ディクショナリーによると、1901年だとあります。20世紀って何かをいきなり言いきっちゃてる（笑）。

ここではどんどん図版資料をみてください。これは今朝店頭に並んでいたエロ雑誌からコラージュしたものです。不思議ですねえ。どの写真ページも女の子の全体を写していないんです。見出しに「超人気、全員プロフィール付き2ショット」なんてありますが、女の子に関する文字データと、顔、胸、尻、足といった体の断片写真が載っているだけです。女の子の全体を把握するには、個々のパーツからイマジネーションを思いっきり駆り立てて想像するしかないんです。文字どおり「像」を「想う」わけです。この想像力に私達は「エロティシズム」を感じるわけです。こういう視点でみていきますと、雑誌を売るためには、決して全体を撮影してレイアウトしない、データも写真も断片に切り刻んで構成することが大切なんです。全体と部分の関係そのものが裸雑誌、フェチ雑誌編集の基本のようです。断片の隙間は読者のイマジネーションが補う、こう

いうイマジネーションを駆り立てる雑誌が不景気な中でも快調であるというのは嬉しいことです（笑い）。

短い時間でしたが「フェティシズム」と「オブジェクト」を切り口として、17世紀以降の文化の流れを大まかにみてきました。その中で言えるのは、世紀末というのは、個物と総合との間の弁証法を、哲学者から商売人までがいっせいに実践する時代である、17世紀以降ずっとそうであるということです。

都築 響一

現代フェティシズム考

フィールドワークから見た「フェティシズム」

高山先生のアカデミックな講演に引き続いて、「フェティシズムの現代」についてお話ししていくわけですが、僕は編集者なので実際の取材やインタビュー、いわゆるフィールドワークを通じて、このテーマについてどのように考えているのかをお話ししていくつもりです。

まず、高山さんの講演を僕なりにまとめてみると、17世紀以降現在に至るまで、人間は自分の好きなもの、気になるものを身の回りに置くことによって、どれだけハッピーになれるかを追求してきたんだと思うんです。また、今日の聴衆の皆さんはデザインを仕事としておられるわけで、魅力的な製品をデザインして少しでも多くの人に買って欲しいと願っておられるのではないかと思います。けれどもその一方で、「高品質で魅力的な物を身の回りに置けば必ず幸せになりますよ」と断言できないジレンマも日々感じておられるのではないのでしょうか。

僕自身もカタログ雑誌の編集から仕事を始めて、海外のおもしろい物を紹介したりしていました。そのころは、物をどんどん買うことで幸せを感じられた時代だったんですね。ところがこの20～10年の間に、物を作る方も買う方もそうじゃないんだと感じているように思うんです。

これからスライドを見ていただきながら話を進めていきますが、このスライドは6年ほど前に僕が編集した『東京スタイル』を機に撮り続けているものです。この本は、東京の一人暮らしの若者の部屋を何の飾りも仕掛けもなく撮影した写真集です。いろんな部屋が出てきますが、僕が感じるのは、写真の中の彼らは好きな物を身の回りのおいて、それで幸福を感じているというのとはちょっと違うのではないかと、ということです。

スライド1

これは女の子の部屋です。西池袋の風俗街のど真ん中にある木造アパートの四畳半。彼女は週に1、2回アルバイトをしながら生活していて、お金がたまると自分の50ccのスクーターで、日本各地を旅行するといった生活をしています。おもちゃ系グッズが好きで、旅先で気に入ったものを買ってきては並べている。2段ベッドの上で寝て、ベッドの下段や壁には好きなものがたくさんあります。

このように、アルバイトで必要十分なお金だけ稼いで、それ以外は好きなことをしたいという人々が都心にたくさん住んでいます。彼らは部屋の大きさや環境なんかにはこだわらないんですね。

スライド2

これは代官山の表通りから一步入った長屋の四畳半の部屋です。風呂ナシ共同便所みたいなアパートの一室で、家賃は2万3千円だそうです。代官山というとブティックのあるおしゃれな街のイメージがありますが、こうした長屋アパートが結構残っています。彼はDJの卵で、部屋には畳んだ布団とレコード、DJの機材があるだけです。昼間はDJの練習をしていて、夜にはクラブに行き、夜中に歩いて帰ってくるといった生活をしています。本人にすれば、お金はないし、基本的には寝るだけだから、どんなに遅くても歩いて帰ってこられる都心に、このようなアパートが残っていることだけでとても喜んでいるのです。

スライド3

ここは落合か仲井あたりに暮らすAV監督の部屋です。スペース的には結構広いんですが、物が足の踏み場もないほどごちゃごちゃしています。物が丘を作っているように、部屋を占領しています。撮影のための三脚を立てるスペースもないほどだった。部屋に入ろうとすると、靴は履いたまま。物で足を怪我してしまうほどなんです。彼はAV監督なんですが、ちょっと変わっています。例えば「女相撲」なんて作品を撮っていて、その女相撲の興行をフランスですてしまうみたいな行動派なんです。それで、部屋には撮影で使ったもの、衣装、機材、本やビデオなどが散在していて、今や手の施しようもない感じです。彼はこの物の中に身を投げ出して眠るのだそうです。

スライド4、5

これも代官山の古いアパート、六畳一間、共同便所の風呂ナシです。住み手は男性のフリー編集者で、お金がない。けれど仕事柄生活が不規則なので、都心に暮らすというのはとても重要なのです。部屋にはベッドとちゃぶ台、それに30センチ平方の小さい流しがあるだけです。

そこで彼は何をしたのか。彼は流しの前に、道端で小さめの青いバスタブを、粗大ごみ置き場から湯沸器を拾ってきて、きれいにして、自分で簡易シャワーを作ってしまったのです。排水は最近、風呂の水を洗濯に使うなんていう小さいモーター付のホースが

ありますが、あれで水を流しにあげて捨てています。こうして、簡易シャワー付きの部屋ですが、家賃は3万5千だそうで、いやな仕事をしてまでお金を稼ぐ必要はないと考えているようです。

スライド6

汚らしい部屋が続いていますが、これは東京芸術大学建築学科の学生の部屋です。学生寮で、だいたいワンユニットで5、6人の生徒が生活していて、それぞれ個室と共有のリビングダイニングがあるといった形式になっています。彼は一人部屋に暮していますが、お金がないからもちろん上等な家具なんか置くことはできない。そこで彼が考えたのは窓際にコンクリートブロックで簡単な囲いを作って、その中に寮の庭からかき集めてきた落ち葉を敷き詰めてベッドにしているんです。「虫出ない?」と聞いたら、出てきた虫はセロテープで壁に張って装飾にしているそうです。それから手前に、紙製のずた袋がありますが、この中にも枯れ葉が入っていてソファとして使っているようです。彼は別に5万円で譲ってもらった車も所有しているんですが、後部座席は使わないからって、土を盛ってサボテンを育てています。一時、自分が置かれた環境や空間を思い切りエンジョイしている人にも結構出会います。

スライド7

今までの例はちょっと極端でしたが、もう少しノーマルというか、これからはそういうケースをお話したいと思います。7から16までのスライドの部屋は全て、代官山にあるパーフェクトルームというコンセプトで東京オリンピックの頃に建設された大きなアパートの部屋です。もともと外国人用のレジデンシャルホテルだったらしいのですが、途中からアパートになっていて、代官山という土地柄か、若いカメラマン、デザイナー、スタイリストなどの自由業の人たちが、事務所や住居として使っています。これからお見せするスライドの部屋はどれも基本的には同じ広さ、同じ家具(棚、引き出し式ベッド、キッチン、机など)が備え付けられています。外はベランダ、東京オリンピック時代の建物ということで窓は鉄枠のすりガラスと、なかなか保存状態のよいアパートです。それを、住人がどのように使い込んでいるのかを見ていただければと思います。

スライド8

若いグラフィックデザイナーの部屋で、住居兼仕事場です。大改造はしていませんが、引き出し式ベッドの部分にコピー機を置いています。ちょっと狭い気もしますが、一人ならば十分なんでしょうね。

スライド9

ここはアパートの1階で、輸入下着屋をしている人の部屋です。店にしてしまっているんですね。壁をピンクに塗っただけで、それほど手は入れていないんですが、ショップ

としてはこれで充分ですね。

スライド10

親子3人が暮らす部屋です。夫婦共働きなんでもう少し広い部屋に引っ越すこともできるんですが、お金が貯まると、親子3人で3カ月くらい東南アジアに旅行に行ってしまうような生活をしています。僕からみると「ここに親子3人？」と感じますが、便利な場所だし、家族はいたって満足しているわけです。

スライド11

続いて、料理スタイリストの部屋です。料理スタイリストというのは、雑誌の料理記事を作る時なんかにはコーディネートする人です。当初は仕事場兼住居だったそうですが、多少余裕ができてきたので、住居は別に移したそうです。部屋中に料理の道具とか、調味料とか、食器とか所狭しと置かれています。

スライド12

この人は画家の女の子ですが、部屋にはほとんど手を加えないで、アトリエ兼住居で暮らしています。古いアイロン台を作業台代わりに使っています。

スライド13

文筆業の人の部屋で、目を引くといえば、板を渡して机にしているくらいですね。

スライド14

代官山でバーテンダーをしている人が住んでいます。とにかく寝るだけ、趣味のレコードがあるだけの部屋ですが彼はこれで充分満足している。彼にとってハッピールームです。

スライド15

デザイナー2人が共同で仕事場として使っています。家賃が安いから、事務所維持のために嫌な仕事を受けなくてもいいと割り切っていました。

スライド16

オタク系仕事の得意なカメラマンの部屋なんで、昔のアニメのレーザーディスクやフィギュアモデルの人形、怪獣なんかととにかくたくさんある。

物欲を超越した人たち

東京に暮らす人たちの部屋を見てきたわけです。見てくると幾つか感じるがあります。彼らはお気に入りの物や拘りの物、独特の生活スタイルをもっているんだけど、部屋自体には何の愛情ももっていないのではないかと。だから、いわゆる広くて、きれいな居心地のよい部屋を求めてはいないのではないかとということです。

実際、僕は『東京スタイル』の編集のために、100件以上の部屋を撮影していますが、5、6年たった今、同じ部屋に暮らしているひとは、5人に満たない。皆、安かたり、特別な思いのない部屋に暮らしているから、身軽なんですね。気に入らなければ次の場所へ移動していく。そういう意味では、部屋に関して決して「フェティッシュ」ではない。

では、彼らは物に対して拘っているのか？あるいはフェティッシュなのか？これもそんな印象を持ってない。高山さんの話に出てくるヴンダーカマーのように、珍しい物、貴重な物に執着しているわけでもない。スライドに出てきた人たちの中に、おもちゃ、レコード、オタク系グッズなどを集めている人たちがいたけれど、彼らが一昔前のコレクターか、フェチに繋がるコレクターなのかといえば、そうとも思えない。彼らにとって物とは、コレクションそのものよりも、同好の士とのコミュニケーションツールとしての意味合いの方が大きいのではないかと。つまり、意外と口下手な最近の若者にとって、こうしたコレクションは「単語」や「言葉」の代りになっているように感じるのです。このように考えてきますと、彼らの多くが、長い歴史の中で人間にまわり付いてきた「物欲」から解き放されている、といったら大袈裟でしょうか。

最近おもしろい話を聞きました。コンピュータアーティストの友人がいますが、大きな作品を作る時に学生に手伝ってもらいたいのです。手伝いに来る学生は非常に軽いユニックスのシステムを入れた安いコンピュータを持参してきて、必要なアプリケーションはそのつどダウンロードすればいいみたいに割り切っているんだそうです。僕らは相変わらず、マックがいい、ウインドウズがいいとか、速いマシンを買わねばみたいな部分にとらわれていますが、彼らは都心の長屋に住んで、業界とメディアが一体となった消費を煽る戦略の動向などは気にもとめないような生活をしているんです。こんな若い人たちに出会うと、精神の転換点のようなものを感じます。